学院史編纂室便り

No. 26
2007年12月14日
関西学院学院史編纂室

★滋賀県立近代美術館で「ウィリアム・メレル・ヴォーリズ」展開催

来年は、西宮上ケ原キャンパスを設計したヴォーリズが、建築設計監督事務所を開業して百年に当たります。それを記念し、2月9日から3月30日まで滋賀県立近代美術館で標記企画展が開催されます。当室所蔵のエッチング(神原浩作)と建築委員会記録が展示される他、本学の田淵結教授と山形政昭大阪芸術大学教授による特別講演会やヴォーリズの建築を巡る見学会等も計画されています。

★日本民家集落博物館で臨時企画展「鳥越憲三郎メモリアル－日本で初めて野外博物館を創った男－」開催

3月24日に逝去された鳥越憲三郎氏を偲び、8月1日から9月30日まで豊中市服部緑地の日本民家集落博物館で標記企画展が開催されました。鳥越氏は、戦前の関西学院大学法文学部で南メソヂスト監督教会宣教師ヒルバーンの教えを受けました。戦争のため帰国を余儀なくされたヒルバーンは教え子にこう言いました。「日本を訪れる外国人が見たいのは工場や名所ではない。日本の風土や慣習を知りたいのだ。そのため、神戸か大阪の近くに民家や民具を集めた施設を君の力でつくってほしい」。恩師のこの言葉が、1956年、日本初の野外博物館誕生につながりました。臨時企画展では当室所蔵資料も展示されました。同館主任学芸員小島久美さんのお話によると、ヒルバーンの予言通り、同館には海外からの来館者が多いそうです。なお、鳥越憲三郎氏は、鳥越皓之元社会学部教授の父上です。

★愛媛県生涯学習センターで「タイへ渡った愛媛県人政尾藤吉－タイ近代法整備の功労者－」展開催

日タイ修交120周年を記念し、来年3月9日まで愛媛県生涯学習センターで標記展示が行われています。1890年に関西学院神学部に入学した政尾は、南メソヂスト監督教会宣教師ウエンライトの感化を受けました。アメリカで法律を学んだ後、シャム(タイ)の法律顧問としてその近代化に貢献しました。

★パルモア学院移転

9月15日、ランバス関係姉妹校の一員パルモア学院がＪＲ元町駅北側から神戸駅前に移転しました。同学院の旧校舎は、ランバス一家の住居、山２番館があった場所に建てられていました。山２番館の建物自体は、昭和初期に神戸市灘区に移築され、1984年12月に取り壊されています。関西学院と関わりの深い土地がランバス関係姉妹校の手を離れるのは、時代の流れとは言え寂しいことです。

★パールリバー・チャーチでランバス・デイ開催

今年も10月第一木曜日に、アメリカ・ミシシッピー州のパールリバー・チャーチでランバス・デイが開催されました。これは、ランバス一家の功績を称えて1900年に始められたもので、以来、礼拝とピクニック・ランチが毎年行われています。現在史跡となっている同教会とランバス一族の墓は、この日のために美しく清掃され、花が供えられます。昨年のランバス・デイでは、当室からお送りした故藤田允氏の写真が飾られた他、ランバス生誕150周年記念式典にお招きしたジョン・ルイスさんご夫妻により、関西学院の資料や写真を展示するコーナーが設けられました。

★訃報：オリーブ・ランハムさん（W. R. ランバスの妹の孫）

ランバス・ファミリーの子孫の一員として、長年、関西学院の活動に関心をお寄せくださっていたオリーブ・ランハムさんが、6月17日、アメリカのノースカロライナ州ダーラムで亡くなりました。82歳でした。

オリーブさんは、兄ウォルターの親友と結婚し、両親と兄夫婦が日本に去った後も中国に残り、中国伝道に生涯を捧げたノラの孫として、蘇州で生まれ育ちました。関西学院には、1980年と89年(創立百周年記念式典)にお越しになりました。ランバス・ファミリーに関する一次資料を数多くお持ちで、折りある毎に、貴重な写真や書簡類を関西学院にご寄贈くださいました。

Mrs. Olivia S. Lanham
－1980－

関西学院のラトヴィア人教師イアン・オゾリンをめぐって

学院史編纂室は、関西学院の歴史だけでなく、卒業生や古い教職員、あるいはメソヂスト教会の日本伝道に関する様々な問い合わせを学内外から受けます。その数は年間７６件（過去３年間平均）に上ります。そんな中から、今回はラトヴィア人教師に関する問い合わせをご紹介したいと思います。　（池田裕子）

１．はじめに

７月２日の午後、大阪外国語大学から思いがけない電話を受けた。「ラトヴィアからの留学生が関西学院で英語を教えていたオゾリンという教師のことを調べているのですが、そちらに何か資料はありますか？」。オゾリン(Ian Ozolin)とは、１９１８（大正７）年９月から２１（大正１０）年７月まで、関西学院高等学部（文科・商科）で教鞭を執っていたラトヴィア人である。アメリカとカナダのメソヂスト教会が経営する学校でラトヴィア人が英語を教えていたというのは、どういう事情によるのだろうか。１９３１年に発行された『文学部回顧』には、「今、ラトビアの文部大臣をやってゐられるといふから大したものだ」との記述もある[1]。かねてより、この教師の存在が気になっていた私はこう問い直した。「大正時代に教鞭を執っていたオゾリンですか？　オゾリンに関心をお持ちのラトヴィア人がいらっしゃるのですか？」。

翌日、タイシヤ・カラブリナさん(Taisija　Karablina、通称ターヤさん）が来室された。ラトヴィア大学歴史学部国際関係科に在籍するターヤさんは、ラトヴィア語だけでなく、ロシア語、英語、日本語に堪能な女性であった。来日前、図書館で１９２０年代の新聞を調べていて、オゾリンの名が目にとまったそうだ。ターヤさんは、イアン・オゾリンと記されていた人物の名のラトヴィア語の綴りと発音を教えてくださった。ヤーニス・オゾリンシュ(Jānis Ozolinš)。こうして、念願のオゾリン調査が始まった。

２．ラトヴィアとラトヴィア人－『琥珀の国』[2]より－

ラトヴィアという国は日本ではあまり知られていない。それは、オゾリンがいた９０年前も今も変わりないようだ。今年春、天皇・皇后両陛下のバルト３国訪問が大きく報じられたことにより、初めてこの国を意識した人も多いだろう。カメラ好きであれば、１９３７年に発売されたラトヴィア製の超小型カメラ・ミノックスを思い起こすかも知れない。あるいは、ソヴィエト・ロシアの支配下にあった１９８９年８月２３日、バルト３国（エストニア、ラトヴィア、リトアニア）の２００万人が手を繋ぎ、６５０キロにわたって人間の鎖を形成した「バルトの道」抗議行動を記憶する人もいるだろう[3]。いずれにしても、日常的に意識することの少ない国のひとつである。そこで、ラトヴィアとラトヴィア人を理解するに当たり、オゾリンの著書『琥珀の国』を取り上げたい。オゾリンによれば、「ラトヴィヤはバルト海の南沿岸にある北欧国の一で、面積は白耳義（ベルギー）の二倍以上…。人口は諾威（ノルウェー）或は丁抹（デンマーク）と略同等で」、そこには「欧州最古の国民たるレット人（或はラトヴィヤ人）」が住んでいる。オゾリンがラトヴィア人を「欧

(1)「オゾリン氏の事どもその他」『文学部回顧』、関西学院文学会、１９３１年、２５頁。文学部の橋本伸也教授がラトヴィア教育科学省のホームページで確認されたところ、１９３１年前後の教育大臣にオゾリンの名はなかったそうである。また、昭和女子大学の志摩園子教授の話では、「議会の選挙の候補者になったことがある」だけで、大臣の経験はないとのことである。

(2) イアン・オゾリン著、曽根保訳『琥珀の国－ラトヴィヤ国の過去と現在』、川瀬日進堂書店、１９２１年(英文タイトル：*Amber Land of Latvia. Past and Present*)。訳者曽根はオゾリンの教え子で、関西学院文学部英文学科を１９２３年に卒業している。曽根の同期には英文学者寿岳文章や日本ライトハウスの設立者岩橋武夫等がいる。同書は、かつては関西学院大学図書館の目録に掲載されていたが、現在は見当たらない。他館については、アメリカ議会図書館、国立国会図書館、大阪府立中央図書館、神戸市立中央図書館の所蔵が確認できる。神戸市立中央図書館の蔵書には、「寄贈　編者」の書き込みがあり、大正十一（１９２２）年五月二十日付けの受入印が押されている。これより先、この項で特に注記のない場合は、『琥珀の国』序文からの引用である。序文は「一千九百二十一年五月十日　神戸関西学院にて　イアン、エ、オゾリン」で結ばれている。

(3) 小森宏美・橋本伸也『バルト諸国の歴史と現在』ユーラシア・ブックレット、No.３７、２００２年、４２－４３頁。

州最古の国民」と主張する根拠はその言語にある。ラトヴィア語は、リトアニア語、古代プロシア語と共に、インド・ヨーロッパ語族の中で古い特徴を最もよく残すと言われるバルト語派に属している。オゾリンは具体例を挙げ、こう述べている。「レット語と比較出来る言語は古代印度のサンスクリットばかりである。併し此の国語も既に死語となってしまったので欧州以外にもレット語より古いアーリア語系の国語は無いのである」。

『琥珀の国』より

オゾリンによれば、日本人がラトヴィアを知らないのは、「露西亜人の手に依て世界地図の表面から取り消されてゐた」からである。ラトヴィアは、「公然と露西亜の『波蘭(バルト)領』として記載されてきたのである。それで筆でなり口でなりで『ラトヴィヤ』といふ字を用ゐる様な事があればそれこそ政治上の罪人だといって迫害を受けたものである」。ラトヴィアを支配下に置いたのはロシアだけではない。それ以前にも、ドイツ、ポーランド、スウェーデンの支配を受けてきた。

ラトヴィアの独立は１９１８年であるが、そのきっかけをオゾリンは日露戦争に求めた。「ロシアの『双鷲』[4]の暗い翼の陰に苦んでゐる一小国が日本の為に最後の勝利を明暮祈ったといふ事は日本人の恐らく気の付かなかったところであろう。其の戦役当時著者はまだ学生であったがラトヴィヤ国中に言ひ知れぬ光明を漲らした旅順陥落の飛報を手にしたかの夕をよく記憶してをる。あの喜ぶべき夕を記憶してをる。此の夕の歓喜は実に日本人以上のものであったと言ひ得られる」。旅順陥落は１９０５年１月２日である。さらに、日本海海戦で日本の連合艦隊がロシアのバルチック艦隊を破ったことにより、日本の勝利は決定的になった。バルチック艦隊はラトヴィアの軍港リエパーヤから出発していた[5]。

その後、「ラトヴィヤ国は全露に蔓延したかの革命の渦中に投じた」。しかし、この革命は独立をもたらすには至らなかった。なぜなら、「露西亜の専制政治は日本に破られた為に打撃は受けたが、レット人の予想通りに其場で倒れはしなかったからである」。

ラトヴィア独立のためには、さらに第一次世界大戦を経る必要があった。「一千九百十七年の露国の第二革命があった後レット人の世論は復、ラトヴィヤ国の独立を高唱し、一千九百十八年一月レット人はロシアの議会に於て其の意見を公表した。ラトヴィヤ国の独立を樹立する為に国会といふ名目の会が組織せられ、一千九百十八年十一月十八日にリガに於てラトヴィヤ国の独立自由国たることを宣言し事実上連合強国（日本を含む）及び其他の諸国に依て承認されたのである」。それから再びソヴィエト・ロシアに強制併合される１９４０年までの間、ラトヴィアは独立国として存在した。オゾリンの関西学院在職は、独立直前から直後の時期に当たる。「日本帝国政府がラトヴィヤ共和国の事実上の独立を真先に承認し又最後の法律上の承認をも久しからずして与へられたる其の公正なる立場を感謝せざるを得ない」とオゾリンは書いている[6]。バルト３国で日本が公使館を置いたのはラトヴィアの首都リーガだけであった[7]。

---

(4)ロシア帝国の紋章「双頭の鷲」に由来する。「双頭の鷲」は現在のロシアの国章にも使われている。

(5)当時、リエパーヤはリバウとドイツ名で呼ばれていた（原翔『バルト三国歴史紀行Ⅱ　ラトヴィア』、彩流社、２００７年、１５５頁)。バルチック艦隊を率いたロジェストウェンスキー(Зиновий Петрович Рожественский)中将が航海中に記した書簡３１通がロシアに住む曾孫の下で発見されたとの報道は記憶に新しい(『朝日新聞』２００７年１０月２５日朝刊１５面)。

(6)志摩園子「戦間期の日本－ラトヴィヤ関係の考察－（１）外交関係の始まり－」『学苑・人間社会学部紀要』第７７２号、昭和女子大学、２００５年、９４頁。ラトヴィアの独立に事実上の承認を最初に与えたのはイギリスであった。次いで日本が承認した。日本政府がラトヴィアの独立を事実上承認したのは１９１９年１月、法的承認を与えたのは１９２１年１月２６日である（同９６頁)。なお、ヴィーチェ＝フレイベルガ(Vaira Viķe-Freiberga)前大統領も、日本を「かつて独立を獲得したわが国を最初に承認した国々の一つ」と認めている（黒沢歩『ラトヴィアの蒼い風』新評論、２００７年、ｉ頁)。

(7)志摩前掲文、９６頁。『琥珀の国』によれば、当時のリーガの人口は約６０万で、バルト諸国最大であった（４３頁)。

3．関西学院におけるオゾリン

オゾリン在職時、関西学院は原田の森にあった。１８８９年、アメリカの南メソヂスト監督教会が創立した当初、神学部と普通学部で始まった学校の経営に、１９１０年、カナダのメソヂスト教会が加わり、２年後に高等学部（文科・商科）が開設された。その高等学部で、オゾリンは１９１８年から教え始めたのである。当時の院長はアメリカ人宣教師ニュートン(J. C. C. Newton)、高等学部長はカナダ人宣教師アームストロング(R. C. Armstrong)であった。７０名の教職員の下、１，２７５名の学生・生徒（中学部７８０名、神学部５４名、高等学部４４１名）が学んでいた[8]。

オゾリンが来た時のことを高等学部文科で学んだ中村清が書いている[9]。「私が一年であった時の夏休みのこと、畑先生が一人の露西亜人（ママ）を伴れて寮へ来られた。そして休暇中或寮生の室を借りて滞在することゝなった。一露西亜人と云ふのは後に文科で英文学の講義をせられたオゾリン氏であった。私がオゾリン氏を知ったのは即ちこの時である。在寮中は朝晩Ｙ・Ｍ・Ｃ・Ａにて英語と露語の会話を教へてゐた。非常に精力家で勉強家であった。毎夜Ｙ・Ｍ・Ｃ・Ａから帰って来ると一時二時、時には三時頃までも勉強してゐた。これには居残りの寮生達は驚いてゐた。氏は未だ日本に来てから日が浅いので日本語を知らなかった。寮生達はつとめて近代的（？）な言葉（日本語）を教へたから堪らない。氏は教った言葉を直ちに男女の区別なしに使用して話しかけた。それで幾度も滑稽が演ぜられた。斯くして休暇中残留の寮生達は氏を中心にして面白い日を送ることが出来た」。

この記述から、オゾリンを連れて来たのが畑歓三であることがわかる[10]。それは、「ラトビアの貧しい家に生まれ大根を囓りつゝ国境を越えてドイツに入り、ラトビアのリガ大学卒業後アメリカにわたって、こゝで畑教授と相知り学院へ来られることになった」という記述とも一致する[11]。関西学院普通学部出身の畑は、早稲田大学文学部専門部卒業後、東京の麻布中学校教師を務めていたが、１９１２年１２月に渡米、アメラダとオークランドの日本人学校で教えながら、カリフォルニア大学のポープ教授(A. U. Pope)の下で美学とギリシャ哲学を学んだ。１９１７年、母校に戻り、高等学部教師として主に英作文を担当した[12]。アメリカでオゾリンと知り合った経緯については、明らかにされていない。

ここで気になるのは、オゾリンがロシア人と記されていることである。独立前のこととは言え、当人はラトヴィア人と書いて欲しかったであろう。なぜなら、オゾリンはラトヴィア人とロシア人の違いについて力説しているからである[13]。「ラトヴィヤ民にはスラブ人と共通な所は全然ないといふ事を記憶せねばならぬ。ロシア人は高加索（コーカサス）系の人種で、レット人、英国人、独逸人、仏蘭西人及び其の多欧州の多くの国民と同じく白皙（はくせき）人種であるといふ事を除いては其の間には何の関係もない。レット人と露西亜人とを混同するのは露西亜人と英国人を混同し、

---

(8) 教職員数、学生・生徒数は１９１７年のデータである（"Report of S. E. Hager, Superintendent of the Kobe District." *Year Book of the Japan Mission. Methodist Episcopal Church. South*, 1918, p. 9.）。

(9) 中村清「啓明寮生活と文科の人々」、前掲書『文学部回顧』、３１４頁。中村によれば、オゾリンが寮に来たのは１年時の夏休み（１９１７年）である。ところが、理事会記録等で確認できるオゾリンの関西学院赴任は１９１８年９月である。中村の名は、『大正六（１９１７）年度高等学部入学志願者受付簿』で確認できることから、当人の記憶違いでなければ、オゾリンは正式赴任の１年前の夏、畑歓三の紹介で関西学院を訪れ、啓明寮に滞在したことになる。つまり、オゾリンの来日は、関西学院赴任の１年以上前であったと考えられる。

(10) 畑歓三のご子息畑道也名誉教授に、オゾリンのことで父上から何か聞いておられないかお尋ねしたことがあるが、オゾリンという名にご記憶はないとの回答であった。同教授は、関西学院交響楽団常任指揮者として、第１回ソビエト演奏旅行（１９７６年２月２９日～３月１４日）に同行され、当時ソビエト連邦に併合されていたラトヴィア共和国リーガを訪れ、ラトヴィア大学講堂の舞台に立っておられる。顧問として同行された小寺武四郎経済学部教授（当時）は、リーガ市長に姉妹都市神戸市長から託されたメッセージを届けられた。これは、関西学院交響楽団にとって初の海外演奏旅行であった。

(11)「オゾリン氏の事どもその他」、前掲書『文学部回顧』、２５頁。橋本教授によると、リガ大学というのは存在しない。「リーガ総合技術高等専門学校（現在のラトヴィア大学の前身）ではないか」とのことである。

(12)『阿ゆみ－畑歓三先生自伝後述』（「三日月の影」別冊）、１１－１７頁、１９５１年。

(13) オゾリン前掲書、１９頁。

日本人とフィリピン人とを混同するのと同じ誤謬である」。

『高等学部商科第４回卒業アルバム』（１９１９年）に、オゾリンの写真が掲載されている。１２年後に発行された『文学部回顧』の冒頭口絵にも同じ写真が使われていることから、これが関西学院に残る唯一の個人写真であろう。同書の記述によれば[14]、「眉は連なり、丈低くゝ色は白かったがとにかく一見甚だ感じが悪く、言葉がドイツなまりの英語と来てるからこいつア困りもの。が性質は至って無邪気、いつもムキになって学生と喧嘩し、そうかと思ふと一緒に肉もつゝかうといふ。昼食はいつも学生食堂で学生と一緒に並んで味噌汁や漬物も食べ、カレーライスにさては玉子丼といふ工合、日本箸もうまく扱ひ、冬でも海へ入られたといふから余程の変り者たるを失はない」とのことである。

オゾリンの雇用は１９１８年春の理事会で承認された。休暇中のカナダ・メソヂスト教会宣教師ウッズウォース(H. F. Woodsworth)の代わりの英語教師として、９月から月給１００円でロシア人バプテスト[15]オゾリン氏を雇用するとの記録がある。引き続き６月５日の常務委員会で、高等学部で英文学を教えるため、９月から学年末まで月給１００円でオゾリンを雇用するとアームストロング高等学部長が説明し、承認された。理事会記録でロシア人とされているのは、オゾリンには気の毒だが、ラトヴィア独立前の公式記録としては致し方ない面もある。

オゾリンが関西学院で担当した授業に関して、次の資料（タイプ原稿）がある。

- *Twelve Lectures on the Meaning and Value of Life: Literary Expressions of the Ethical Problems of Epicureanism, Stoicism, Mysticism, and Activism, or Ideal-ism.*[16]
  Ian A. Ozolin, Kwansei Gakuin College, Kobe, 1919, Japan, 80p.
- *An Introduction to English Poetry: A Syllabus of Talks on the Elements of English Poetry Delivered at the Kwansei Gakuin College During the Spring Term of **1919**.*
  Ian A. Ozolin, Kobe, 1919, 32p.

関西学院辞職に当たってオゾリンに寄せられた声は、短い在職期間にもかかわらず、その貢献の大きさを偲ばせるものである。１９２１年６月２０日の常務委員会は、辞職するオゾリンに謝礼百円を贈ることを決定した。さらに、ウッズウォース文学部長とベーツ(C. J. L. Bates)院長より、オゾリンに対する感謝決議が提案され、承認された。この他にも次の言葉が贈られている。

- 最近の欧州大戦乱を母に持てる新興国ラツトビアの領事オゾリン君が高商部の講師として数年間学生に与へられたる紳士的感化と学術上の知識とは多大の感謝に値するものなるに、此回の辞任本国リガ市への帰郷は深く惜みて氏を送ると共に新建国の為に斯新人の安健と努力を祈る（『関西学院学報』第１号、１９２１年７月２５日）。
- オゾリン氏　リトアニア（〔ママ〕）の人で英文学に造詣深い同氏は過去一年間文科教授として熱心教鞭を執られ英文学と云ふ物が始めて解りかけたと文科生を感嘆せしめた同氏は任期盡きて学生の留任懇願も功を奏せず満州へ向け出発された（『関西学院同窓会報』第２号、１９１９年８月１０日）。

後者が伝えるオゾリンの満州への出発は、興味深い内容を示唆している。最終的な辞職は１９２１年７月なので、１８年９月から１年間勤務した後、いったん関西学院を離れたことを意

(14)「オゾリン氏の事どもその他」、前掲書『文学部回顧』、２５頁。ラトヴィア人は、バルト海のように穏やかな海を見ると、水温に耐えられる限り、季節も構わず服を脱いで海に飛び込む習性があるらしい（前掲書『ラトヴィアの蒼い風』、２５頁）。

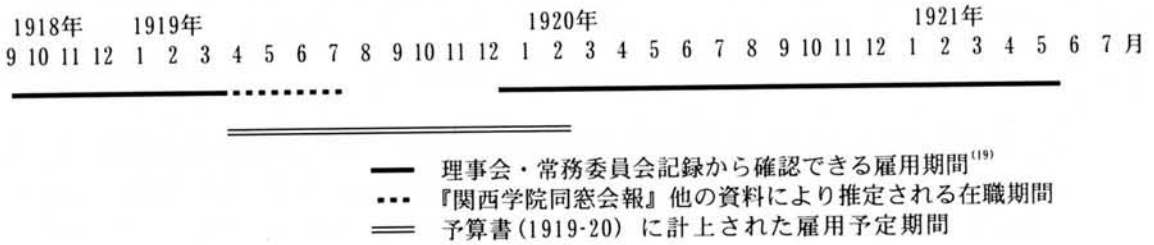
(15)『琥珀の国』によると、ラトヴィア国民の３／４はプロテスタントで、その「大多数は福音派のルーテル教会に属」している。ルーテル派以外のプロテスタントで「最も活動してをるのは浸礼教徒である」（５０頁）。バプテスト教会が日本で創立した学校に、関東学院（１８８４）、西南学院（１９１６）等がある。なお、当時の銀行の初任給は４０円、公務員の初任給は７０円であった（朝日新聞社『値段史年表』、１９８８年、５１頁、６７頁）。

(16) オゾリンは、この原稿を「最も心優しいアメリカ人女性エレン・ギブス夫人(Mrs. Ellen Gibbs)」に捧げている。

味するからである。前者にラトヴィア領事とあるが、これは、「関西学院大学の前身で英語と英文学を教えていた」のと同時に、「神戸で新生国家ラトヴィヤの領事代理の仕事をもしていた」という志摩教授の調査とも一致する[17]。オゾリンは、「日本の政治、経済事情をラトヴィヤ外務省宛に送付しているだけでなく、両国間の貿易についても推進しようとしてい」たらしい。さらには、「ウラジオストックにある臨時政府の極東・シベリア代表部のマズポリス(Jānis Mazpolis)とも連絡を取り合い、ラトヴィヤあるいは、シベリアまたは中国からのラトヴィヤ人の特別使節の可能性を１９２０年には尋ねている」。「当時、極東には、およそ５０万人のラトヴィヤ人の避難民や植民者がいた」のである。『村上博輔日記』によれば、オゾリンが神戸港を出発したのは１９１９年７月７日である[18]。それから、関西学院に再雇用される翌年１月まで、満州、あるいはシベリアで、祖国のため何らかの活動に従事していたと思われる。志摩教授は、来日前アメリカで「ラトヴィアについての広報的な活動」をオゾリンが行っていたと指摘している。独立を達成するには「事実上の国家承認」を取り付ける必要があった。ラトヴィア人は、第一次世界大戦終結前から、後に初代外相となったメイローヴィッツ(Z. A. Meierovics)を中心に外交活動に力を入れていた。来日前のオゾリンの活動も、その一端を担うものであったと推測される。来日後のオゾリンは、関西学院教師として学生に慕われながら、その活動をさらに展開させていったのではないだろうか。その意味からも、オゾリンの来日理由、関西学院教師となった経緯について明らかにする必要がある。関西学院の対応がオゾリンに好意的であったことを考え併せると、米加のメソヂスト教会がラトヴィアの独立運動にどう関わったかという点も興味深いところである。

オゾリンの再雇用は、１９１９年秋の理事会で、デイヴィス(W. A. Davis)の代わりの臨時教師としてニュートン院長から説明され、承認された。引き続き１２月１９日の常務委員会で、南メソヂスト監督教会宣教部を代表してニュートン院長が、デイヴィスの代わりの宣教師スタッフとして、１９２０年1月1日から春学期の終わりまでオゾリンを雇用する許可を求め、承認された。デイヴィスはいったん復帰したものの、同年１１月、離日した。オゾリンの雇用は、８月１日から１年間、週１８時間、月給３００円で延長された。

各種資料から確認できるオゾリンの在職期間は次の通りである。



(17)志摩前掲文、９２－９５頁。オゾリンの教師以外の活動に関しては、この部分からの引用である。なお、ラトヴィアが東京に領事館を開設したのは１９２６年である。オゾリンのいた頃、神戸には２１カ国の領事館・公館があり、２２カ国約４６００名（欧米人２４６２名、中国人２１００名）の外国人が居留していた。１９１８年の神戸在留ロシア人は５２名で（ポダルコ、ピョートル　E.「日本の〈西欧化への窓口〉となった神戸－来日ロシア人の研究に関連する考察－」『青山国際政経論集』第６５号、２００５年2月、１０６－１０９頁)、白系ロシア人が大勢来日したのは、１９１７年１０月の革命後、とりわけ１９２０年代前半からである（ポダルコ・ピョートル「太平洋戦争と日本在住の亡命ロシア人－第二次世界大戦終結６０周年をめぐって－」『青山国際政経論集』第６８号、２００６年1月、１２６頁)。

(18)大正８（１９１９）年7月7日（月）の日記に、「朝十時オゾリンヲ送ラント波止場ニ往ク、逢ハズ」とある。村上は関西学院高等学部教師である。日記には、オゾリンがチャペルで講話したことも記されている（大正１０〈１９２１〉年2月9日、6月6日、２７日)。

(19)オゾリンの雇用に関する記述が見られる理事会・常務委員会記録は次の通り。Meeting of the Board of Directors: April 17, 1918, Nov. 22, 1919, Aug. 3, 1920, & April 21, 1921. Meeting of the Executive of the Board: June 5, 1918, Nov. 20, 1918, Dec. 19, 1919, Aug. 28 1920, & June 20, 1921.

４．オゾリンが与えた影響－教え子由木康（ゆうきこう）の場合－

学生は教師から様々な影響を受ける。しかし、その感化を教え子の人生や作品から読みとり、具体的に指摘することは困難である。関西学院の学生は、祖国独立に熱い思いを寄せるオゾリンから多くのことを学んだと推測される。具体的には、「劇、詩の方面に関して学生の眼を開いてくだすった人。語学大会もオゾリン講師によって劇らしくなった」と評されている[20]。そこで、オゾリンの教え子として、パスカル研究家、讃美歌作家として名をなした由木康を取り上げたい。１９２０年に高等学部（文科）英文学科を卒業した由木は、忘れられない教師として、畑歓三、河上丈太郎と共にオゾリンの名を挙げている。

由木によれば、オゾリンの授業は凄まじかったようだ。「年齢からいえば学生より少し上くらいの青年であり、私たちには英詩や英文学史の講義をしてくれた。非常に熱情的な男で、わずか数名の少クラスで、あたかも大演説をするかのように、こぶしをふりあげ、足をふみならし、口角泡を飛ばして論ずるさまは、全くすごいほどであった。この人の感化で私はブラウニングに興味をもつようになり、この詩人の全集（ケンブリッジ版）を相当の高価で手に入れただけでなく、卒業論文もブラウニングの人生観を取り上げるに至ったほどである。オゾリンは関学の近くに下宿していたので[21]、時々、銭湯で一緒になり、文字どおり真っ裸でつきあうこともできた。しかし、彼はまもなく風のように日本を去り、ヨーロッパに帰ってしまった」[22]。

由木が作詞・翻訳した讃美歌は６００を越える[23]。中でもとりわけ有名なのは讃美歌１０９番「きよしこの夜」の訳詞であろう。関西学院のためには、校歌「緑濃き甲山（かぶと）」を作詞している。第２校歌とも呼ばれるこの歌は、創立５０周年を記念して１９３９年に作られた。時節柄、敵性語が使われている「"Old Kwansei"や『空の翼』の代わりに、公然と歌える新校歌の制定を切望する声が全学院からわき起こ」[24]り、同窓の由木と山田耕筰に作詞作曲が依頼された。

「緑濃き甲山」を聞いて驚かされるのは、その美しく穏やかなメロディである。時局を考えてという事情とは裏腹の、讃美歌のようなこのメロディはどう理解すればいいのか戸惑うほどである。山田の前作「空の翼」が応援歌風であるのとは対照的に、「緑濃き甲山」は「ナポリ民謡を思わせる美しいメロディー」と評される[25]。また、「『空の翼』での『Mastery for Service』や『輝く自由』などに代わって『樹々、白亜、光』や『信、知識、力』などが物静かにつづられ」ている[26]。それでいて、歌詞の中に関西学院のスクール・モットー Mastery for Service の意味が込められていると伝えられる[27]。新校歌制定に当たって、由木と山田の間でどのような会話が交わされたかは想像の域を出ないが、キリスト教主義教育を建学の精神とする関西学院で学んだ２人が、時局を考えて作った校歌であるなら、その奥に深い思いが秘められている可能性がある。それが、讃美歌としか思えないメロディであり、Mastery for Service を織り込んだと伝えられる歌詞ではないだろうか。

この歌を作る時、由木の胸にオゾリンの教えが去来していたとは考え過ぎであろうか。なぜ

---

(20)「オゾリン氏の事どもその他」前掲書『文学部回顧』、２５頁。なお、オゾリンは、「イアン・ポーロックとラトビア文学」を『関西文学』第３号（関西学院高等部学生会、１９２１年５月２０日）に寄稿している（栗秋草笛訳）。

(21)オゾリンの住所として記録に残るのは、「兵庫県播州舞子電車停留所近傍」である（『商光』第１０号、１９２１年７月）。ただし、これは由木卒業後に発行されたものである。由木の在学中は関西学院の近くに住んでいたのであろう。

(22)由木康『出会いから出会いへ：ある牧師の自画像』教文館、１９７６年、５１頁。この他にも、由木はオゾリンの想い出を書いている（「浮世風呂のオゾリン先生」『母校通信』第５号、１９５０年、１２頁、「原田時代の師友寸描」『関西学院七十年史』１９５９年、４５２頁）。

(23)由木前掲書、９６頁。

(24)浅野昭太郎「学院校歌物語〔４〕緑濃き甲山」『母校通信』第７７号、１８－９８７年、１６頁。

(25)半田一吉『関西学院の歌－関西学院校歌・応援歌・学生歌資料－』、関西学院キリスト教主義教育研究室、１９８１年、７６頁。

(26)浅野前掲文、１６頁。

(27)「当時は全ての作家、芸術家に対し、作品に軍国調を表現するよう勧告されていましたが、由木康氏はそのような風潮に迎合せず、賛美歌のように誰にでも分かる平易な言葉で、一途に母校の繁栄を願って作詞されたのは、圧政に屈しない立派で勇気のある姿勢だと思います。この歌詞の中には"Mastery for Service"を平易に訳されている部分があると音楽の保科一雄先生から教わったことがあります」（２００７年１０月１５日付松井辰男氏〈旧中昭20〉から比留井弘司学院史編纂室事務長宛書簡）。

なら、ラトヴィア人こそ様々な思いを歌に込めて来た民族だからである。１８４１年、ドイツ人地理学者コール(Johann Georg Kohl)はこう言った。「ラトヴィア人は誰もが生まれもった詩人で、誰もが詩を詠み、誰もがその詩を歌うことができる」[28]。ヴィーチェ＝フレイベルガ前大統領によれば、「民謡はラトヴィア人のアイデンティティの核心であって、歌うことはラトヴィア人である証拠の一つである」。１９２０年代初頭に作られた国歌は、ソヴィエト・ロシアに強制併合されていた間、その存在を抹殺されていた。代わりに、第２の国歌として反抗の精神を込めて歌われたのが、民謡『風よ、吹け』であった。

５．おわりに

関西学院で第２校歌が歌われ出した頃、オゾリンの祖国にも危機が迫っていた。１９４０年６月１８日、バルト３国のソヴィエト・ロシアによる占領が完了し、翌年６月には多くのバルト人がロシア奥地に追放された。その１週間後、独ソ不可侵条約を破ってナチス・ドイツが侵攻してきた。バルト３国の中にはナチスの力を借りて独立を回復しようとする動きもあった。スターリン(Иосиф Сталин)率いるソヴィエトとヒトラー(Adolf Hitler)率いるドイツの間で翻弄された挙げ句、バルト３国はスターリンに再占領される。この過酷な運命にオゾリンはどう立ち向かったのか。それを明らかにするにはさらなる調査が必要である。

１９８０年代終わりに、加藤登紀子さん他が歌った「百万本のバラ」が日本でヒットした。これは、ソヴィエトの歌手アーラ・プガチョワ(Алла Пугачова)が歌って２千万枚を売り上げたМиллион алых роз（百万本の深紅のバラ)の翻訳であった[29]。作詞ヴォズネセンスキー(Андрей Андреевил Вознесенский)、作曲パウルス(Raimonds Pauls)によるこの歌の原曲が、ブレジネフ(Леонид Иьич Брежнев)体制末期の１９８１年に、「マーラが与えた人生」というタイトルで世に出た、ブリエディス(Leons Briedis)作詞によるラトヴィアの歌であることを知る人は少ないだろう。

「百万本のバラ」は、貧しい画家が女優に寄せる思いを歌った、実話に基づく実らぬ恋の歌である。一方、原曲の「マーラが与えた人生」の方は、マーラ（ラトヴィアの女神、母性の象徴）は娘に命を与えたけれど幸せはあげ忘れたという内容で、他国の支配を受け続けたラトヴィアの悲哀が込められている。この詞をもの哀しいメロディに乗せ、優しい声で歌ったのは、ラトヴィア人歌手アイヤ・クレレ(Aija Kulele)であった。

加藤さんの２年も前から、岩谷時子さんの訳詞で「百万本のバラ」を歌って来られたのは小田陽子さんである。ロシアの歌と信じ込んでいた曲が実はラトヴィアの歌であることに気付かれた小田さんは、自らラトヴィアまで飛んで関係者に会われ、原曲のＣＤ化を実現された[30]。おかげで、今ではこの歌を日本語で聞くことができる。２１世紀に生きる日本人女性のこの感性と行動力をオゾリンが知ったら何と言うだろうか。それこそ、百万本のバラを小田さんに捧げることだろう。一方、バルト諸国をナチスから解放したのは、スターリン率いるソヴィエトだとするプーチン大統領(Владимир Владимирович Путин)の言い分に対しては、「こぶしをふりあげ、足をふみならし、口角泡を飛ばして」反論するに違いない。

学院史編纂室便り No. 26（2007年12月14日）
関西学院学院史編纂室
〒662-8501 西宮市上ケ原一番町1－155
TEL:0798-54-6022 FAX:0798-54-6462
http://www.kwansei.ac.jp/gakuinshi/ARCHIVES.htm

(28)ラトヴィア人と歌については、黒沢歩『木漏れ日のラトヴィア』新評論、２００４年、１０１－１２８頁参照。

(29)「百万本のバラ」と「マーラが与えた人生」については、前掲書『木漏れ日のラトヴィア』４－１５頁参照。なお、パウルスは、後にラトヴィアの文化大臣を務めた。

(30)「マーラが与えた人生 DEVAJA MARINA」は、２００６年１１月にラッツパックレコードから発売された『ROMANCER』の８曲目に収録されている（http://www9.big.or.jp/~odayoko/romancer.html より視聴可能)。